はしがき

神田外語大学言語科学研究センター（CLS）の紀要第８号をお届けします。CLS は、本学大学院（言語科学研究科）に附置されていることから、大学院の専任教員による研究プロジェクトの円滑な遂行を支援すると共にそれらと関係のある活動(各種研究会や講演会の開催など)を中心に行っています。今年度は、前年度から継続のプロジェクト３つに加え、新たに、２つの日本学術振興会科学研究費の補助金によるプロジェクトが発足し、多忙ですが充実した１年となりました。巻末（175～205 頁）には、本年度の活動が、開催した研究会などの詳細にも言及して報告されていますので、ご参照下さい。

新規のプロジェクトの１つは、堀場裕紀江教授が研究代表者の４年間の基盤研究（B)『語彙とテクスト理解：読解に関わる語彙知識の多面性と語彙の意味について』で、堀場教授を中心に遂行された平成 14-16 年度の基盤研究(B)『テクスト理解と学習』の成果を取り込み、言語（日本語）学習者の語彙知識について理論的・記述的・実証的に研究する意欲的なものです。もう一つは、CLS の神谷昇研究員を研究代表者とした３年間の基盤研究（C)『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（以下、神谷科研）で、英語教育（特に、2011 年から必修化される小学校英語教育）で培われるであろう英語力を、言語学・英語学の視点から明らかにしようとするものです。

前年度から継続のプロジェクトのうち、長谷川信子による基盤研究(B)『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』（長谷川科研）は２年目にあたることから、対外的な活動を中心に、MIT の宮川繁教授によるレクチャーシリーズ、７月に２日間にわたり都内の本学関連施設（神田外語学院）で行われた国内外の研究者を迎えてのワークショップなどを開催しました。また、同じく２年目の小林美代子教授に

よる基盤研究(B)『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』(小林科研)では、神田外語グループ全体からの支援も受け、ブリティッシュカウンシルと共催で、昨年に引き続き、２月に大規模なワークショップを開催しました。

本紀要には、そうした活動の成果および、それらから派生した論文が８編が収められています。＜言語学編＞の６編は、長谷川科研のテーマ(かつ、井上和子顧問によるゼミの内容)とも関わりの、文の意味・機能とCPの構造に言及したものが中心です。遠藤論文では副詞節の機能範疇の構造と主節の関係を、井上論文では現象文におけるCP構造内のForce句を、Ueda論文では日本語のモダリティを取り込むCP構造を扱っています。藤巻論文は長谷川科研のワークショップでの発表を発展させ、慣用句の一部が取り立て詞となる構造を分析し、神谷論文は英語のthere構文を場所倒置構文との類似性を捉える形で考察しています。＜言語教育編＞の２編は早期英語教育関係のもので、神谷他の論文は、４年目を迎えたJSTからの委託研究（巻末の205頁参照）の成果を織り込みつつ、神谷科研の観点から『英語ノート(試作版)』の語彙の調査と分析を提示し、宮本論文は、小林科研のワークショップでの発表を発展させ、共に、小学校での英語教育に実践的に応用可能な興味深い内容となっています。

そうした活動の全てにわたり、その遂行は、CLSの宮本弦特任講師、CLS専任研究員の神谷昇さん、町田なほみさん、森谷浩士さんはじめ非常勤研究員、大学院生や学部生、そして、事務補佐員の椎名千香子さんの献身的な働きのお陰で可能となりました。心より感謝申し上げます。

２００９年３月

言語科学研究センター・センター長
長谷川　信子